

霧島市地方創生有識者会議(第2回結婚・出産・子育て合同会議) 要旨

開催日時	平成 27 年 8 月 10 日 (月) 13 : 30 ~ 17 : 15			
開催場所	国分総合福祉センター 3階 研修会議室			
出席者	会議有識者部	山口研究部会長、田原研究副部会長、小川委員、中峯委員、田口委員、内田委員、津之地委員、井上委員		
	推進本部専門部会	竹下部会長(保健福祉政策G長)、林元副部会長(教育総務G長)、安楽委員(男女共同参画推進G長)、山口委員(子ども・子育てG長)、堂平委員(保育・幼稚園G長)、島木委員(健康増進課課長補佐)、入口委員(子ども発達サポートセンター副所長)、東郷委員(こどもセンターG長)、藤崎委員(企画政策課長補佐)		
	事務局	横山企画政策課主任主事		
	その他	(株) 価値総合研究所 西野		
公開・一部非公開又は非公開の別		公開	傍聴人数	8人
<p><u>会次第</u></p> <p>1 開会</p> <p>2 「霧島市人口ビジョン(素案たたき台)」等について</p> <p>3 「基本目標別(素案たたき台)」について</p> <p>4 第1回合同会議の振り返りについて</p> <p>5 意見交換</p> <p>6 その他</p> <p>7 閉会</p>				
<p><u>意見交換の要旨</u></p> <p>○ 30歳代になってから出会いの場を求めると婚期が遅くなる。結婚に対する意識づけは20歳代からがいいのでは。</p> <p>○ 年齢が高い方が、子育てに関する悩みを抱えている。親の介護を抱えているケースや同時期に子育てをしている若い方に相談しづらいのが理由の一つ。例えば、婚活というネーミングではなくて、20歳代のうちから男女ペアで何かをする機会をつくれたら。</p> <p>○ 婚活というネーミングでは参加しづらい。若い男女が楽しく参加できるようなイベントが必要。県外では鬼ごっこ婚活、ゴミ拾い婚活、農業体験婚活など面白い取組が存在する。婚活イベントに参加して相手が見つからなければ落胆するが、「鬼ごっこ」なら相手ができなくても言い訳できる。防災は、子どもがいる家庭はそれなりの動きを、独身であればまた違った動きがあるので、例えば、防災訓練と婚活を同時に行うのはどうか。</p> <p>○ 出会いの場の創出は事業者単体では困難と思われるので、行政、商工会、事業者が連携して取り組んでみては。結婚がある程度見えてきたら、細かいフォローをすることで結婚率は上昇する。そのフォローについては事業者が担えばいいのでは。</p> <p>○ 結婚の良さを若者に周知していかないといけない。</p>				

- 子どもはよく病気をするため、現金に余裕がない時に病院に行かざる得ない事態が発生する。償還払い方式から現物給付方式に変更できないか。
- 出産したくない人の声として「身近な人が子育てに苦労している。」、「メディアから流れるニュースが虐待ばかりであるので不安。」といったものがある。地道ではあるが、モデルケース（実在の人がどのように子育てをしているか）を発信するのも一つの手段である。
- 一人目を出産した後、「旦那が定期的に夜勤になるため、産後を一人で育てなければならなかった。」という声をよく聞く。必ず産後のケアが受けられるような体制が必要。産後に限らず困っている方はカテゴリ分けができる。例えば、「実家が遠い」、「旦那の帰りが遅い」、「転入後1年以内で知り合いがいない」等、困っている状態に合わせた支援体制がとれれば効率もよい。
- 一時預かりのための送り迎えが困難という意見も多い。産後も自分で運転しないといけない方も多い。横浜市は産前・産後サポートタクシーが運行している。鹿児島市には産前産後ケア施設がある。例えば、産後3ヶ月までの間は、上の子どもの送迎や家事の援助などのサポートがあれば。健診の際、保健センターで悩み事を記入させられるが、その内容は蓄積されているのか。「ご飯を食べに行けるといった身近な情報」や「数多く寄せられる悩みに対する情報」をぐんぐんの木に優先的に掲載すれば、悩み事が解決する可能性が高くなるのでは。
- 一時保育や支援センター等多くの情報を提供するようにしているが、お母さんはその情報を知らないケースが多い。若い人はインターネットを使って情報を収集するケースが多いが、中にはインターネットを使わない人もいる。そのため、チラシをポストに投函するなどの工夫を行っている。出産後、不安定になっている方が多く、どのようにして不安を取り除いてあげるか。自分の気持ちをさらけ出せる相手が必要。相談を聞く体制づくりも重要である。
- 子どもが1人だと、お父さん・お母さんとの2つの関係であるが、子どもが2人になると3つの関係になる。非常に大きなメリットである。
- PTAの際は、子どもは学校から出ないといけないので、教室を解放して地域の方が子どもを見てくれる体制がとれれば。子どもを一人で家にいさせることに対し不安を感じている方が多いので、夏休み中の学童保育など、親以外が子どもに目を届く仕組みが必要。夏休期間中、空教室の開放が可能であれば、地域ボランティアの方に日替わりで教室に来てもらう取組も考えられる。
- 地域の観点からすると公民館単位も考えられる。ボランティアでやっていく方法もあるし、地域の公民館施設をコミュニティ施設として有料で開放することも考えられる。
- 長島町では、高校・大学を卒業後に故郷に帰ってきて、故郷に居住している間は奨学金を免除する「ぶり奨学金制度」を創設した。霧島市においても、市内に就職した場合には奨学金を免除する取組を検討できないか。財源の一部は霧島市内の企業による負担金。その企業に就職できたら理想的である。
- 「この職業に就くためにはどのような勉強をしたらいいか。」を含め職業体験を実施できたら、勉強に対する意欲が湧くのでは。地元の仕事を知る機会が必要。